

巻 頭 言



1961 年 を 迎 え て

会 長 浅 田 長 平

1961年の新春を迎えるに当り、まず初めに会員諸賢の御多幸をお祈りすると同時に、旧年にも増してわが国鉄鋼技術の進歩発展のため御健闘あらんことをお願いいたします。

そもそも鉄と鋼は、文化国家における国民生活の基本をなすものであり、またすべての工業の根幹とも申すべきものでありまして、一国の文化と繁栄が進めば進むほど鉄鋼の需要はいよいよ増大し、従つてこれが供給をますます豊富にしなければならぬ事は言を俟たない事であります。現在わが国の鉄鋼業は粗鋼の生産高が1年約2000万tであります。これが金額を平均t4万円として計算すれば8,000億円となります。一方わが国は古来豊葦原の瑞穂国といわれ、国民の大半が農業に従事しているという有様であつて、米は国として最も重要な産物と認められてきたのでありますが、その産額は1年約8,000万石でありますので、1石1万円として計算すれば8,000億円となり、米の金額と鉄鋼の金額とはほぼ相似たものとなります。いわんや鉄鋼から加工生産される2次製品たる各種の機械、自動車、車輛、船舶、農具等々を合算すれば、金額において恐らくその数倍、何兆円という巨額に達するものと思われまふ。従つて国民経済において鉄鋼の占める位置は甚だ大なるものであるといわなければなりません。

この国民経済上最も重要な地位を占める鉄鋼について、現在日本鉄鋼連盟は主としてその生産方面を担当し、製鉄、製鋼、一般鋼材、特殊鋼、鑄鍛鋼、等それぞれの製造部門にわたつて強力に生産の推進に努力しているのでありますが、一方わが鉄鋼協会は、鉄鋼に関する学術、技術方面を担当して、その進歩発達に寄与せんと邁進しておる次第でありまして、ともにわが国家経済、国民経済に対し負つていゝる使命は実に重大なるものがあると信じます。まことにこの生産、製造方面を担当する連盟と、学術、技術をその責務とする協会とは離るべからざる関係にありますので、今後一層その連繫を緊密にし、表裏一体となつてその重大な使命を完うするよういたしたいものであります。

御承知の通り、さきに経済企画庁の発表したところによりますと10年後の1970年(昭和45年)にわが国の粗鋼生産高は4,800万tに達するものと予想され、現在の2,000万tに比べると約2.4倍となる見込とのことでもあります。米はその時おそらく到底2.4倍などという数字に達することはある

まいと思われまゝ。一方機械方面は約 4.5 倍という驚くべき巨額が生産されるとのことでありまゝが、その機械の主なる材料は申すまでもなく鉄鋼であります。従つてわれわれの関与している鉄鋼の事業は今後ますます発展さしてゆかねばならないのでありまして、その関係からして、鉄鋼に関する学術、技術の研究、発明、改良はいよいよ拍車をかけて進歩させることが必要であり、直接還元、連続鑄造、その他原子力の応用等に対しても鉄鋼部門の改良が予想され、期待される所以であります。

一方わが国は、原料であります鉄鉱石の面において余り恵まれておらず、また粘結炭や原油等の生産も甚だ貧弱であります。しかしながら幸いなことにわが国は四面環海の島国であつて、四時の気候も好く、また人口が豊富であつて労働力の供給に恵まれており、工業国としての資格において十分なるものがあると信ぜられるのであります。従つて若し運輸方面の問題さえ解決されるならば、世界中の原料、燃料は十分に確保できることと思われまゝ。現にわが鉄鋼業者は、マレー、インド、南米、北米、アフリカ、蒙州等の各地から鉄鉱石を輸入するため、鋭意開発の歩を進めております。またその鉄石を運搬するために、5 万 t ないし 10 万 t という巨大な鉄石専用船を建造してその輸送に當つてゐる有様であります。振り返つてわが鉄鋼協会が従来調査研究したところを見ますと、鉄鋼に関する諸部門のうち主として製錬の問題を対象として取り上げて来たようであります。製錬の問題もとより結構であります。今後においては更に一步を進めて、鉄山の開発、輸送の問題等も研究の対象とし、鉄石専用船の問題、各地鉄山における地質の問題、港湾施設の問題等々が、簇々と会誌“鉄と鋼”の誌上を賑わすようにいたしたいものと切望する次第であります。

ここに 1961 年の新年を迎えるに當り、念頭に浮びますことは 60 年台の今後の 10 年以内に、鉄鋼の生産高は実に 5,000 万 t 近くに増大し、わが国は世界第 3 位の鉄鋼国にランクされんとしておることあります。この鉄鋼界の大なる躍進に対し、わが鉄鋼協会としましては及ぶ限りの寄与貢献をいたしたいと念願いたしておる次第であります。これがためには協会の組織を拡大強化し、十分な力を発揮できるようにいたしたいものであります。同時にその拡大強化を実現するためには、優秀な会員を多数結集し、相共に協力して協会事業の推進に努めることが肝要と思われまゝ。幸いにしてわが協会は近年会員がますます増加し、既に 7000 人を超えんとしております。しかしながらわが国最大の産業であります鉄鋼業界の技術陣の数から見ますならば、なお拡大の余地は少くないことと思われまゝ。少くとも差当り 1 万の会員を擁する協会たらしめたいと考えております。会員諸賢におかれては、何卒この趣旨に賛せられ、熱心な御勧誘によつて多数の優秀な会員を迎え、ともども相携えて研鑽に努めるようにいたしたいと望むものであります。

ここに些か所感を述べ、もつて年頭の御挨拶といたします。